

稱讃

二七五号

二〇二五年十一月一日発行



稱讃寺

親鸞聖人報恩講のお知らせ

日時 十二月十四日(日)正午

発行 浄土真宗本願寺派 稱讃寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

H P shousanji.com

義に依るとは、義のなかに好悪・罪

こじつ あらそ

福・虚実を諍ふことなし、ゆゑに

語はすでに義を得たり、義は語に

あらざるなり。人指をもつて月を

おし

指ふ、もつてわれを示教す、指を看

じきよう

かん

視して月を視ざるがごとし。人語

りていはん、《われ指をもつて月を

指ふ、なんぢをしてこれを知らし

む、なんぢなんぞ指を看て、しかう

み

して月を視ざるや」と。これまたか

くのごとし。語は義の指とす、語は

ゆび

義にあらざるなり。これをもつての

ゆゑに、語に依るべからず。

『教行信証』(化身土巻)『註釈版聖典』286頁



十一月一日、『サンドウィッチマン&芦田愛菜の博士ちゃん』(テレビ朝日系)は五月にも放送された「未完の世界遺産サグラダ・ファミリ

ア特別編」でした。今回も芦田愛菜さんが外尾悦郎さんにインタビューするところが放送されました。

外尾悦郎さんは、ガウディの遺志を承け継ぐ一人と言われる世界的彫刻家です。

インタビューの中で、外尾悦郎さんは、次のようなことをおっしゃいました。

資料のない仕事を任された時、誰も助けられないし、ガウディの意を汲み取ろうとしても分からなかった。それは、ガウディをみようとしてたにすぎなかった。

あるとき、ふと、ガウディをみるのではない。

ガウディも僕をみているはずはない、ガウディがみている方向をみるのだと気づいたと、応えられました。

仏教の言葉が浮びました。『楞伽經』が由来に

みと

なっているようですが、「月を指せば指を認む」

(月を指し示しているのに、教えられる方は指の先ばかり見て、いつこうに月をみようとしな

い)という言葉です。上の表題に掲載いたしま

した文は、『教行信証』化身土巻に掲載された『大智度論』(龍樹菩薩作)の引用文です。

「こ」では、「月」を真理や悟り、仏法を表わしています。「指」は教えや言葉、經典に例えられます。この教えは、教え(言葉)はあくまで真理に到達するための「手段」に過ぎず、手段に固執してしまつては本質を見失つてしまうことを示唆しています。

また、「指が月を指すとき、愚者は指をみる」とも言われ、私たちは、物事を学ぶ際や教えを請う際に、表面的な部分にばかりとらわれて、本当に大切な本質を見誤つたり見失うことが多々あることを示しています。

外尾悦郎さんも、ガウディの思いを汲み取ろうとしたとき、ガウディの頭で考えていたことをみようと、ガウディに成りきろうとしたのかもしれません。それでは、何もわからなかったのです。それが、一所懸命に何年もサグラダ・ファミリアの建築に関わつて、漸くガウディがみていた方向をみることによって、ガウディが求めていたもの、思つていたことがわかるようになったと述べられました。

このことは、外尾悦郎さんという、世界的彫刻家だからこそ成し得たことかも知れませんが、

親鸞聖人が『教行信証』の中で、「指月の譬」を引用されたところは「聖道釈」のところでありました。

また、浄土門の教えとしても、道綽・善導の「指方立相」(浄土教で阿弥陀仏の浄土が西方にあると指し示し、その浄土の種々な相(すがた)をあきらかにする)として説かれるのです。

『仏説阿弥陀経』にもお釈迦さまが「これより西方十万億仏土を過ぎて世界あり。名づけて極楽という。その土に仏まします、阿弥陀と号す。今現にましまして法を説きたまう。」と最初から最後まで方便をもつて、阿弥陀さま・お浄土のことをいろいろ説かれます。

「方便」とは、真理に導くために、私たちが分かるように、形となつて現れてくださった仏さまのはたらきをいいます。

『正信偈』は、阿弥陀さまのお心(本願)とはたらきが、お釈迦さま、それを受けた龍樹菩薩←天親菩薩←曇鸞大師←道綽禪師←善導大師←源信和尚←源空聖人の七高僧に脈々と承け継がれ、私・親鸞にも行き届いていることを讃えられて、最後に「唯可信斯高僧説(ただこの高僧方が説かれる阿弥陀さまのご本願を信じるだけです)」と述べられました。

「西方のお浄土」と言われ、言葉に固執してしまふのも私たちであります。かと言って、誰も月を指すように教えてくれなければ、全くわからないものです。

諺か仏典の意識かわかりませんが、「指が月を指すとき、愚者は指をみる」とも言われています。月をみているつもりで、実は指のみをみていては、勘違いしてしまう私であります。自分の受け取り方が正しいと思つてしまふのでしよう。

『歎異抄』第二条の「念仏は、まことに浄土に生まるるたねにてやはんべらん、また地獄におすべき業にてやはんべらん。総じてもつて存

知せざるなり。たとひ法然聖人にすかされまゐらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候ふ。そのゆゑは、自余の行もはげみて仏に成るべかりける身が、念仏を申して地獄にもおちて候はばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔も候はめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」

いろんな行をしたわけでもない私です。やったこともないからこそ、やればできる自分だとの思いもあるのかもしれませんが。

親鸞聖人のように、比叡山で二十年間、念仏三昧等の修行をなされ、他の人が仏を觀たというのに、觀れなかつたとの挫折も味わわれ、自分の愚かさに気づかれた。

親鸞聖人のなさつたことの後も辿れない私ですが、親鸞聖人が味わわれた阿弥陀さまのご本願を聴いていく以外にないのかもしれない。

十月から全国各地の浄土真宗のお寺さんで親鸞聖人の報恩講がおつとまりになつています。十一月十一日から十六日まで、築地本願寺でもおつとまりになります。当稱讃寺は十月十四日です。そして翌年一月九日、十六日は京都本願寺で「正忌報恩講」がおつとまりになります。

親鸞聖人を雲の上の存在と崇めるだけではなく、親鸞聖人が求められ、私に伝えてくださった「ご本願を味わつて参りたいと思います」。

特集 金子大榮師のご領解 ㊦

『親鸞の人生観』

教行信証真仏弟子章

金子大榮 法蔵館 一九六六年初版

十四 釈迦と弥陀

本文 光明師のいはく、ただうらむらくは、

衆生のうたがふまじきをうたがふことを。浄土対面してあひたがはず。

弥陀の摂と不摂とを論ずることなかれ。こころ専心にして、廻すると廻せざるにあり。乃至あるいはいはく、けふより仏果にいたるまで、長劫に仏をほめて慈恩を報ぜん。弥陀の弘誓のちからをかふらずば、いづれのとすいづれの劫にか、娑婆をいでん。乃至いかんが今日宝国にいたることを期せん。まことにこれ、娑婆本師のちからなり。もし本師知識のすすめにあらずば、弥陀の浄土いかんしていらん、と。

口語訳 光明師はいう。

疑うところぞ うらみなる

浄土は対い むか たがわねを
大悲の摂護 知らまくば

己がこころの 向を省むきよ
仏のきとり ひらくまで
長くめぐみを たたえなん
弥陀の誓に あわざれば
いづれの時か 世を超えん
思いやかけし 浄土へと
まこと世尊の 力なり
本師のすすめ あらざれば
いかでか入らん 弥陀の国

一 光明師とは善導大師のことである。大師は長安の光明寺に居住せられた。その著作も多い。それで一々の書名を挙げず、特に光明師の称号を用いられた。ここにまず記されたものは、『依観経等明般舟三昧行道往生讃』で『般舟讃』と略称されているものである。その般舟三昧とは諸仏現前三昧ということ、この三昧を行道とすれば諸仏現前して往生の願が成就するのである。大師はつねに期間を定めては、身・語・意の三業にての三昧を行道とせられた。『般舟讃』はその行道における讃歌である。しかるにその讃歌が特に『観経』等によられたことは、『観経』が特に善導の有縁の経教であつたからである。したがって大師の『観経』に対する領解は、その註釈である四帖の疏に十分にあらわされている。そこには善導の道心が見られるとともに、当時の『観経』註釈家の説に満足できない点もあきらかにせられている。

仏教を学ぶものは信解を主とし、仏教に学ぶものは行証を要とする。しかしその信解と行証とは別のものであつてはならない。しかるに多くの学僧にはそれが自覚されていなかったようである。善導ひとり、経教を鏡として自身の道を求められた。それが四帖の『観経義』である。

したがって『観経義』は釈迦の教えに照らし出されたる自身を表白せるものといつてよいのであろう。その意味においては、二種深信の説こそ善導の中心思想となつているものである。しかるにその機の深信とは、経教に見出されたる人間生活の懺悔であり、法の深信とは釈迦に勧められたる弥陀の大悲を讃嘆するものである。これによりて善導は『観経義』のこころを、さらに懺悔讃嘆の様式として表現せられることとなつた。それが『往生礼讃』『般舟讃』等の著作となつたのである。したがってこれらの著作は、懺悔と嘆仏との交響楽として、嘆仏に懺悔の余韻を残し、懺悔おのずから嘆仏の基調となつている。そこには機を信ずると法を信ずるとの別はない。それが諷誦するものに深い感銘を与え、その声明音楽は日本へも伝わりて、浄土を願うものの身心を養育せるのであつた。

二

ここに挙げられた『般舟讃』の三偈、その語感によれば、第一の偈は特に念仏のこころとして領解せられる。念仏者は浄土に対面している。

浄土とは念仏者の願いによりて見出されたものに他ならぬからである。したがって浄土は念仏者のところにたがうことはなく、その願いに応じて必ず往生することができる。それは疑うまじきことである。

しかるにそのことを疑うのは、阿弥陀の光が念仏者を攝取して捨てられないことを信じないからであろう。浄土往生というも攝取の光益の他ないからである。しかるにその攝取不捨の光を感じずるものは念仏である。しかしてその攝取不捨の光こそは現前の阿弥陀仏にほかならない。しかれば「弥陀の摂と不摂とを論ずる」よりは、念仏のこの願いをあきらかにすることが手ぢかな道といわねばならないのであろう。念仏のこの願いがもつぱら浄土へと廻向しているならば往生は疑いなきことである。その専心廻向が浄土からの招喚をも感じ、攝取不捨の光をも受容するのである。

ここに専心廻向の南無と、攝取不捨の阿弥陀仏との感応が成就する。これによりて念仏は帰依を求むるところであり、帰依のこのところそのものでありそのままに帰依を得たることとなるのであろう。これすなわち念仏における阿弥陀の徳に依るのである。したがって「浄土対面してあひたがは」ぎることも、攝取不捨の力である。これはまことに不思議の真実である。しかるにこの真実は信じがたい。なぜであらうか。奇怪なことは信じて真実のことを受け入れない。それが凡夫のこのところである。真理

ならば承認するが真実なるものを受容しない。それが知識人のこのところである。修行の功を積んで成就することは、信じられるが、称名念仏に功德具足するということは領かれない。それが道徳を頼むもののこのところである。こうして念仏は行われず、真実は信じられないのである。

ここには念仏は易行であるから信じられないという心理があるようである。されど念仏は易行なればこそ、ただ信するより他ないものである。信じがたいとは信するより他ないことであるからである。真実とは疑うまじきことである。しかるにわれらはなにゆえにそれを疑うのであろうか。「恨むらくは衆生の疑ふまじきを疑ふ」ことである。この悲しみ歎きの深さにおいて、いまさらに「よくよく煩惱の興盛にこそ」と懺悔せずにおれないことである。

三

第二偈は「あるひはいはく」に始まる。これは往生人のこのところになつての言葉である。善導ひとりの感情ではあるまいという表示である。それだけ歌嘆の息は深く長い。しかしてその重点を後半の「弥陀弘誓の力をかふらずば、いづれの時、いづれの劫にか娑婆をいでん」に集中されていくのであるが、願いは特に「娑婆を出づる」ことにあるのである。したがって、この偈意を領解するためには、何よりも娑婆を出づることの意義を明らかにせねばならない

「娑婆とは忍土で、この世界のこと。この世界

の衆生は内に種々の煩惱があり、外には風雨寒暑などがあつて、苦悩に堪え忍ばねばならないから忍土というのである。しかるに内なる煩惱とは生の本能による愛と憎しみとによるものであり、外からの情勢に堪え忍ばねばならぬものは、風雨寒暑よりも国家・社会の動乱である。したがって、この内なる感情と外なる情勢とが調整されなかがぎりは、苦悩を免れえないのが人間の運命なのであろう。

その内なる感情を調えるものが道徳であり、その外なる情勢を調えるものは知識である。されどその知識にも限界があつて、真に安樂であることができないのみならず、かえつて苦悩を深めることにさえなるのである。しかれば人間の一生「いづれの時」か、この娑婆を出づることができよう。世界は「いづれの劫(時代)」になつても、真の平和を期待することはできない。こうして人間は永遠に苦悩を離れることができないのであろうか。

ここに「弥陀弘誓の力」がある。その弘誓とは人間にかけられた無限の大悲である。その無限の大悲によりて、浄土の願いはあらわれ、そこは苦悩のない所と説かれてある。しかれば浄土とは内なる愛憎の煩惱なく外なる順逆の障がないところであるにちがいはない。しかしそれはあくまでも無限大悲の世界であるから、われらはその世界の帰依のところとしてのみ、真に苦悩に耐え得るのであろう。苦悩が人間の免れえない運命であるとすれば、そこに要求されるものはそれに耐え得る力で

ある。しかれば「弥陀、弘誓の力をかぶらずば、いづれの時、いづれの劫にか娑婆をいでん」ということは、来生の安樂を期待するよろこびではあるが、それはそのままに、翻って人間生活の罪障を思い知らしめるものである。こうしてここにも嘆仏と懺悔との交流が流れているのである。

しかれば「いまより仏果に至るまで、長劫に仏をほめ、慈恩に報ぜん」ということも、この弥陀大悲のありがたさを思う至情にほかならぬのであろう。この語句には娑婆を出ずること、仏果に至ることとは別であるように思わしめるものがある。それは「往生は易く成仏は難し」という思想によるものであろう。されど浄土が本願成就の場であるかぎり、往生と成仏とは別なものではない。しかれば難い成仏も易き往生によりて果遂せしめるところにこそ弥陀弘誓の力があるのであろう。されどその仏の道は無限である。覚(さと)りをひらけば覚のはじめもなければ覚の終りもない。したがって仏であることと仏となることとの別もないことが身証されるのであろう。ここに「今より仏果に至るまで長劫に仏をほめ慈恩を報ぜん」という尽きない感情があるのである。

四

第三の偈は特に釈迦の教恩を讃えるものである。善導にあつては弥陀の本願といつても、釈迦の教えによりてのみ信受せられたのであった。それだけ釈迦の教恩を感じることが深かつたのである。それで『般舟讚』の序説も「まさに大いに懺悔すべし、釈迦如来はこれ慈悲の父母なり」ということから始められた。しかし讚文にそのところが繰り返されている。しかればこの第三偈は特にその感懷を表現せるものといつてよいのであろう。「いかに今日、宝国(浄土)に至ることを期せん。まことにこれ娑婆本師の力なり」と歌い、それを折返して「もし本師知識の勧めにあらずば、弥陀の浄土いかんしていらん」と嘆じてある。ここに音韻の妙趣もあるのではないであらうか。

しかるに釈迦の慈恩といつても、善導にあつては『観経』の教説の他にはない。それは『観経』において自身の道を見出されたからである。ということとは、『観経』の対機である韋提希に自身を思い合はされたからであらう。したがって弥陀の弘誓でなくては救われないものは、五障の女人韋提希であつたといわねばならない。言い換えれば、釈迦その人の智慧ではどうすることもできないものが煩惱業苦に沈めるものであるということである。仏陀はその聖弟子たちに対しては四諦・八聖道を説き、それによりて生死を解脱せしめることができた。したがって釈迦はその弟子たちの指導者であることもできたのである。されど煩惱の生活を離れることのできないものに、涅槃の光を与うることは釈迦といえどもできなかったのであらうか。そこに開かれたものが、弥陀の本願であり、念仏の法である。『観経』はそのことを教うるものであつた。

ここにおいて、その教意を推せば、弥陀の本願とは釈迦の大悲を表現せるものといつてよいのであろう。釈迦は自身の智慧ではどうすることもできない韋提希に対する大悲を弥陀の本願として説きあらわせるのである、という意味において釈迦の願いであつた。そこに無限の自覚がある。自覚の無限性があるのである。

したがって、ここに感ぜられるものは、釈迦の教説と弥陀の本願とは表裏となつてゐることである。真にそれなればこそ釈迦は本師ともいわれ、善知識とも仰がれるのであろう。こうして「弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず」と伝承されたのであつた。

五

その釈迦の説教の真実は善導の御釈にあらわれ、さらに「法然のおほせ」となり「親鸞がまうすむね」となりて伝えられた。そこに伝統の歴史があるのである。その伝統において、善導・法然・親鸞の三師がそれぞれ如何に求道し信解し、行証し聞思せられたかは計りしめることができぬことであらう。されどそのすべては本師釈迦の恩徳に帰せられることである。したがって仏教の歴史を貫いて感知せられるものも、弥陀の本願の他にはない。こうして、われらは永遠真実なる法と、人間の精神生活との対応を、釈迦・弥陀の名において身証せしめられてゐるのである。

浄土真宗のビハークアを考える

六大臣の諸思想と仏教の縁起思想

1 王舎城悲劇の根底にある諸思想

―六師外道

人間は、自らが生きている時代や地域のパラダイム、すなわち、その時代に通用している概念的な思考方法に影響されている。たとえば、21世紀における諸外国が、資本主義というものの見方に立って現実を解釈するように、この阿闍世や釈尊の時代にも、六師外道というものの見方が流行していた。六師外道とは、釈尊とほぼ同時代の紀元前5―6世紀頃に、ガーンジス河中流域のマガダ国を中心に活躍した六人の思想家であり、仏教の思想と異なるので外道と呼ばれる。阿闍世の病気を心配した六人の大臣は、六師外道の思想を象徴したものである。また、六師外道の諸思想とは異なる思想として、釈尊は、縁起思想を阿闍世に説いている。したがって、王舎城悲劇の背景にある「ものの見方」を理解するために、六師外道の思想をふりかえり、縁起思想の独自性がどこにあるのかを明らかにしておきたいと思う。

まず、六人の大臣の思想をもう一度ふりかえってみよう。

(一)大臣月称 がつしやう ふらんなかしやう 富蘭那迦葉。

プーラナ・カッサパ
(Purana Kassapa)

〈道徳否定論〉

善や悪の行いに対して、何の果報ももたらさないという考え方である。因果を否定し、道徳を否定し、自己の行為に対する責任をとらないものである。この立場は、因果を撥無(はつむ)する(はねつける)空見であり、快樂主義に近い。

(二)大臣蔵徳 ぞうとく まかりくしやりし 末伽梨拘睺梨子。

マツカリ・ゴースーラ
(Makkali Gosala)

〈王法至上主義・自然決定論〉

この世では王が法律であるから、王がとった行動に罪はない。決定論者とは、意志に基づく行為を否定し、すべては自然に決まっているという見方である。人はまた人として生まれることが決まっておおり人の苦楽は、誕生した後自然に受けることが決定している。したがって殺生をしても、その罪の責任を負うことはない。この立場は、邪命外道ともよばれた。

(三)大臣実徳 じつとく さんじややびらていし 刪闍耶毘羅胝子。

サンジャヤ・ペーラッティブダ
(Sanjaya Belatthiputta)

〈懷疑論・不可知論〉

懷疑論者とは、確定的な回答をさけ、どちらともいえないという不明瞭な議論を展開したので、不可知論ともよばれる。人は前世からの果報をあとで受け、人間の意志によって自由に行っているわけではないから、この世で悪を犯しても、その責任を受けるとはいえない。

(四)大臣悉知義 しちぎ あぎたししやきんぼら 阿耆多翅舍欽婆羅。

アジタ・ケーサカンバラ
(Ajita Kesakambala)

〈唯物論・無因無縁説・快樂論〉

唯物論とは、この世界には地・水・火・風の四元素のみが実在しているだけであり、善因善果、悪因悪果という因縁を否定し、快樂を求める。この立場は、順世外道ともよばれる。

(五)大臣吉徳 きとく からくだかせんえん 伽羅鳩駄伽旃延。

パクダ・カツチャーヤナ
(Pakudha Kaccyana)

〈無因論的感覚論・七要素論〉

無因論的感覚論とは、因を認めず、人間は地・水・火・風・苦・楽・生命の七要素から成っていると考え方である。それらの七要素は不変で、人は作られたものでもなく、他を作り出すものでもない。たとえ人を殺しても、剣はその七要素の隙間を通るだけであるので、その罪はない。

大臣無所畏 尼乾陀若提子。
ニガンダ・ナータブツタ

(Nigantha Nataputta)

〈自己制御説・戒律重視・ジャイナ教開祖〉

ジャイナ教では、動植物をはじめとするあらゆる存在に靈魂が宿ると信じ、その生命を守るために、不殺生、不妄語、不偷盜、不邪淫、無所有などの戒律を厳守する。仏教は生きとし生けるものの尊嚴を平等に尊重する点は、ジャイナ教と共通するが、靈魂を固定的な実体として認めるジャイナ教の見方は、仏教の無我思想にはない。ジャイナ教では、世間の虚飾を捨て、断食や苦行に専念して、世俗の業の影響を取り除き、心の汚れを浄化することをめざす。この立場は、裸形外道ともよばれる。

なお親鸞は、この大臣無所畏と尼乾陀若提子という名前だけを信巻に引用し、無所畏の考え方を示している『涅槃經』の經文を引用していない。

これらの六師外道の思想は、当時のインドにおける一般的な思考方法を理解するためにも、仏教の縁起思想との違いを理解するうえでも必要である

また注目すべきことは、親鸞が、この六師外道を象徴する六人の大臣のアドバイスを削除せずに、ほぼそのまま信巻に引用して紹介しているということである。おそらく親鸞は、縁起思想とは異なる諸思想が存在することを、こ

の世界の現実の姿としてありのままに知っておく必要があると感じたからであろう。その意味では、これらの六師の思想は、単なる過去の思想、パラダイムとして軽視せずに、時代や地域を越えた現代社会においても、なお存在している思想として見直していくことができるだろう。

2 縁起思想の独創性

― 諸思想との比較

そこで、この六師外道の思考方法の特徴を、およそ四つの思想に整理して、それらの「ものの見方」とは異なる、仏教の縁起思想の独自性を明らかにしておきたいと思う。

(一) 尊祐説(いんそんゆうせつ)

第一に、宇宙がたった一つの原因によって支配されているという見方(因尊祐説)を、仏教はとらない。因尊祐説とは、苦・楽・不苦不樂を感受する一切の原因は、自在神が作ったものであるという主張である。たとえば、創造主であり唯一である神のような存在にすべての現象を収斂させるような立場を仏教はとらない。仏教は一人ひとりの意志と行為を尊重し、行為の結果や原因などを自己以外のものに求めない。あらゆる存在は因となり縁となつて相互に関係しあっているからである。

(二) 宿作因説(しゆくさいいんせつ)

第二に、人間がこの世で経験するどのような

こともすべて運命であるという見方(宿作因説・因宿命説)を仏教はとらない。宿作因説・因宿命説とは、苦・楽・不苦不樂を感受する一切の原因は、外在的な宿命、前世に作られたものであるという主張である。因なくして始めから果があつたとする決定論的主張(無因有果説)とも似ている。この第二の立場は、すべての存在が始め(因)において結果が定まっているという宿命論のような見方である。もしも、すべてが運命によって定まっているならば、この世において善い行いをするのも、悪い行いをするのも、すべて運命であり、幸・不幸も生まれながらに運命によって決まってい、運命の他に何ものをも存在しないことになる。運命論は、人びとにこれはしなければならないとか、これはしてはならないという願いも努力もなくなり、世の中の協調や進歩や反省もなくなることになる。

(三) 無因果説・無因無縁説

第三には、因も縁もないとする見方(無因果説・無因無縁説)を仏教はとらない。無因果説・無因無縁説とは、苦・楽・不苦不樂を感受する一切には、原因も縁もなく、起こったものであるという主張である。原因と結果との連続性(因果関係)を否定する見方や、原因のなかに結果が存在しないという見方は、善因善果、惡因惡果を認めない思想となり、たとえば、道徳を否定する立場や、呪術などで人間の運命を左右する立場を認めることになる。

〔Ⅱ〕唯物論説・物質還元論

第四には、すべてのものを物質的变化に還元して精神的な価値を認めない見方(唯物論・物質要素論)を仏教はとらない。唯物論とは、ものごとの根源は素材としての物質のみとし、觀念や精神の存在を認めない思想である。この唯物論的な存在理解だけでは、人間の精神的な営みである苦しみを解決することはできない。この指摘は、物質還元主義による人間理解でもあてはまる。物質還元主義とは、心の悩みや罪を自分のこととして引き受けず、すべて物質の現象作用として片付けようとする見方である。この唯物論的な見方は、善い努力や行爲が善い結果をもたらし、自他を害する悪い行爲が悪い結果をもたらすといった、世界を連続的に見ようとする価値観がない。その結果、一人ひとりの生きる力を育てられず、人間社会の倫理も成立しなくなる。

これら四つの主張は、人の行爲や努力を否定するため、仏教の演技思想とは異なるとしたのである。

〔Ⅲ〕縁起説

それでは縁起の真理の独創性は何であるか。縁起の真理は、すべてのものは因と縁とによつてたえず変化していく思想である。人間の願いと努力によつて、自他ともに苦しみから安らぎに導くことをめざす。縁起にもとづく生き方は、人間一人ひとりの自由と精勵を尊重し、あらゆるものに対する慈悲や感謝の自覚

を育むのである。この縁起という思想は、仏教独自の思想であり、西欧思想には見当たらない。

縁起(dependent origination)の独創性は、「相依相成」(interdependent co-

realization)「相資相待」(interdependent co-arising)と表現される。すなわち、あらゆる存在が、互いに相助け合つて、成長していくという見方と、人間のひたむきな努力と行爲によつて、自由に新しい因果が形成されていく見方にある。自己が、時空を超えて、あらゆるものとつながっていることに深く目覚めたとき、自己の拘(こだわ)つている小さな世界から自由になる自己のいのちが相互依存の世界で、かけがえない意味を持つていることにめざめる。また自己と等しく、他のあらゆるいのちも唯一のものとして存在し相互に支えあつていることに気づく。この縁起のめざめとは、一人一人が縛られている我執から解放されたとき、新たに開かれてくる自由な境地である。

※「相依」とは、相互に依存すること、「相成」とは、互いに相手を完成させること。二つのものが相合して完全なものになることを意味する。

※「相資」とは、相たすける関係、「相待」とは、相互依存、互いに相よつて存立することという意味する。

(中村元著『仏教大辞典』より)

他力本願

「他力本願」という言葉は、浄土真宗においてみ教えの根幹に関わる最も重要な言葉です。

浄土真宗の宗祖である親鸞聖人がいわれた「他力」とは、自然や社会の恩恵のことではなく、もちろん他力の力をあてにすることでもありません。

また、世間一般でいう、人間関係のうえでの自らの力や、他の力という意味でもありません。「他力」とは、そのいずれをも超えた、広大無辺な阿弥陀如来の力を表す言葉です。

「本願」とは、私たちの欲望を満たすような願いをいうものではありません。阿弥陀如来の根本の願いとして「あらゆる人びとに、南無阿弥陀仏を信じさせ、称えさせて、浄土往生せしめよう」と誓われた願いのことです。

この本願のとおりに私たちを浄土往生させ、仏に成らしめようとするはたらきを「本願力」といい、「他力」といいます。

私たち念仏者は、このような如来の本願のはたらきによる救いを、「他力本願」という言葉で聞き喜んできたのです。ここにはじめて、自らの本當の姿に気づかされ、いまのいのちの尊さと言義が明らかに知らされるのであり、人生を力強く生き抜いていくことができます。

(大阪・瑞應寺様ブログより)

※とうして、他力本願を味わうことが、自らの本當の姿に気づき、このいのちの尊さと意義が明らかに知り、力強く生きていけることになるのか、聞き尋ねて参り、伝えていけたらと思います。